

京都大学人文科学研究所共同研究 最終報告書

1. 研究課題

人物で見る第二次世界大戦

The Second World War in Personal Perspectives

2. 研究代表者氏名

林田 敏子

HAYASHIDA, Toshiko

3. 研究期間

2022年4月-2025年3月

4. 研究目的

2007～2015年に人文研で行われた第一次世界大戦についての共同研究は、国内外から注目される成果を少なからず生んだが、しかし、「現代の起点」となった「未完の戦争」たる第一次世界大戦がいかなる「現代」を現出させたのか、という問いは依然として残されている。とりわけ、僅か20年の時を隔てて再び惹起されたもう1つの世界大戦の理解を抜きに、「現代」を語りえないことは論を俟たない。本研究班は、第一次世界大戦研究のそれのみならず、「人文学 beyond 2020」を精力的に議論してきた「21世紀の人文学」班の成果をも引き継いだうえ、この間次々と発表されている世界大戦の世紀に関する最新の研究に基づいて、終戦から80年を控えた第二次世界大戦の新たな全体像を構築し、混沌とした現代世界を把握するための見通しを提示することを目的とする。その際、本研究班では、ヒューマン・ファクターに着目して第二次世界大戦を検討する方法を採用する。第二次世界大戦の理解にあたって重要な論点にかかわってくる特定の人物に則して、この戦争を特徴づける諸側面を浮き彫りにする、との意図からである。

The First World War, the foundational event of the modern world, was examined in the research project, 'A Trans-disciplinary Study of the First World War', conducted at the Institute from 2007 to 2015. A vital question to be inquired next: What kind of modern world emerged out of ashes of the First World War? In tackling this question, a comprehensive reconsideration of the Second World War, another global convulsion within twenty years since the end of the first, is absolutely essential.

The research project attempts to draw a fresh and updated overall picture of this traumatic catastrophe with an emphasis on the human factors. As Ian Kershaw points out, the Second World War was 'a war of apocalyptic proportions', which certainly brought 'an assault on humanity unprecedented in history'. Especially the genocidal mass murder of Europe's Jews

was 'the lowest point of mankind's descent into the abyss of inhumanity'. Therefore the task, raised by Timothy Snyder, 'turning the numbers back into people', is acutely posed to all of us as researchers and humanists. Human perspectives adopted by the project could be meaningful in challenging this formidable task.

5. 研究成果の概要

本研究班は 2007~15 年に実施された「第一次世界大戦の総合的研究」班の課題を引き継ぎつつ、終戦 80 年を控えた第二次世界大戦を「人物」に焦点をあてて再考することを目的とした。特定の人物に着目することで新たな切り口や論点を提示し、通説的大戦理解に何らかの修正を迫る、という目論見である。人物をクロース・アップする手法から明らかになったのは、人の一生やそのコアとなる活動期は、開戦と終戦によって区切られた大戦という時間的な枠組とは必ずしも一致しないこと、また、戦争の主体となる国家という空間的な枠組とも完全に重なるわけではないこと、である。終戦を待たずに命を落とした者、大戦後も長く影響力を保持した者、国と国との間で引き裂かれた者、逆に複数の国の架け橋となった者、等々、有名か無名かを問わず、「人」と戦争の間には必ず時間的、空間的な「ずれ」が存在する。そして、この「ずれ」こそが、大戦にかかる様々な思考の枠組を揺さぶる契機を与える、本研究班の活動から導かれた中核的な成果はここにある。

6. 共同研究会に関連した主な公表実績

2024 年 6 月に全 4 回の連続セミナー「第二次世界大戦再考」を開催した。オンラインなし対面のみの形態をとったが、各回とも参加者は 100 名を超えた。また、京都新聞（6 月 12 日付け）にも報道された。

7. 研究成果公表計画および今後の展開等

本研究班の成果報告は、通常の論集ではなく、個々の班員の単著を双書として連続的に刊行するかたちで具体化される。人文書院との間で、2026 年 3 月刊の 3 冊を皮切りに、計 16 冊の単著を刊行する計画が合意されている。こうしたやり方は上述の第一次大戦班の前例があるが、通常の論集が多くの読者を得ることがますます難しくなりつつある現状において、比較的コンパクトな単著をシリーズで世に問う手法には、成果公開の新たな可能性を切り開く意味があるものと期待している。